

〔研究論文〕

当事者の声から読み解く“日本の若者の海外旅行離れ”を巡る諸概念 －観光行動研究×質的研究アプローチ－

高井典子

〔Article〕

Constructs Underpinning “Fewer Young Japanese Travelling Abroad”: Voiced Experience through Qualitative Study on Tourist Behaviour

Noriko TAKAI-TOKUNAGA

Key words: 観光行動 (Tourist Behaviour)、海外旅行 (Overseas Travel)、若者 (Young Generation)、質的研究 (Qualitative Research)

Abstract

This paper addresses a phenomenon of “fewer young Japanese travelling abroad”: the departure ratio of young Japanese in their 20s decreased in late 2000s in comparison with that in late 1990s when the figure was highest ever. The study was undertaken from the tourist's behavioural perspective and the data was collected at the individual level. Both deductive and inductive reasoning were adopted in forming constructs, which then inform and a hypothetical model in explaining the phenomenon.

A qualitative part of study is the focus of this paper and the interview data represent lived experiences of the young Japanese who cooperated with the study. Coding procedure was adopted in line with *Grounded Theory Approach*. Open coding produced a number of codes as well as a set of categories, some of which are relevant to theoretical notions elaborated by research practices other than tourism such as *Leisure Constraints Research and Social Cognitive Theory*. Among them are concepts of *Negotiation* and *Self-efficacy*. At the same time, each individual interview was reconstructed into a meaningful storyline or a respective model.

The phenomenon has drawn interests of tourism trade, government and the general public in Japan as it does connote not just a shrink of outbound tourism market but inner looking attitude of the young generation of our own time.

I. 海外に行かない日本の若者たち

1. はじめに

本稿は2000年代後半日本のメディアや観光関係者のあいだで話題となった“若者の海外旅行離れ”現象を巡る著者の一連の研究のうち、実際の若者の生の声を分析した質的研究についての報告である。

日本における“若者の海外旅行離れ”とはどのような現象を指すのか。2000年代後半ごろ、それまで海外旅行市場のマーケットリーダーであった若者が以前ほど海外に行かなくなった。法務省のデータを見ると、1996年に463万人の20歳代日本人が海外に出かけているのに対し、その数値は2008年には262万人にまで減少している(法務省2008、2009)。同期間に、20歳代の人口が1883万人から1425万人に減少していることが第一の原因と考えられる(総務省統計局・人口推計)。その一方、人口に対するのべ出国者数の比率である「出国率」で見ると、同期間には20歳代の出国率が24.6%から18.4%へと減少している。そこで、西村・高井・中村(2014:338)は「日本人若者の海外出国率がもっとも高かった1990年代半ばと比較して、2000年代後半の若者の出国率が全体として低迷していた現象」を“若者の海外旅行離れ”と定義している。

“若者の海外旅行離れ”を巡ってはメディアが論評を繰り返した。海外に出かけようとしないう若者の生態を取り上げ、内向き志向の若者、或いは、消費をしない若者と結びつけ、「若者論」として紙面・誌面を賑わせたのは記憶に新しいところだ¹。観光産業側では、若者の海外旅行需要を喚起するための旅行商品を開発したり、政府(観光庁)では若者の海外旅行振興を目的とした研究会を立ち上げるなどの動きが見られた。教育界(大学)においても“若者の海外旅行離れ”に関するシンポジウムが開催され、実際に若者を登壇させて自ら語らせた。このように“若者の海外旅行離れ”は、各種のセクターが注目する現象であった。これに対し観光研究者のあいだでも“若者の海外旅行離れ”を巡る研究が行われた²。

著者は2008年以降、共同研究チームのメンバー(玉川大学・中村哲/同志社大学・西村幸子)と共に“若者の海外旅行離れ”現象を読み解く研究を継続して行ってきた。その研究方法論は、観光者の行動と認知プロセスを個人レベルに落とし込んで分析する観光行動研究のアプローチである。

2. 若者の海外旅行離れ”に潜む意味

何故これほど“若者の海外旅行離れ”が、世の中の関心を集めたのだろうか。

その理由として第一に考えられるのは、旅行業界にとって“若者の海外旅行離れ”が現在の需要減少のみならず、将来に亘る市場の縮小に繋がる問題であるという点だ。1980年代後半以降、日本の海外旅行市場は若者が市場のトレンドセッターであった。他の世代がそれを追随する形で日本人による海外旅行市場は急カーブを描いて量的拡大を続けていく。当時の若者たちの多くにとって、海外旅行はそのライフスタイルになくはならないパーツであり、だからこそ今50～60代を迎えてアクティブシニアとなった彼らが日本の海外旅行市場を支える存在となったのである。もし、今の若者が海外旅行を経験せず歳を重ねてしまったとしたら、将来の海外旅行市場は現在の規模を維持できないだけでなく、大幅な縮小が予想される。

第二に、“若者の海外旅行離れ”が日本の若者の「内向き志向」「外に向かって出て行かない傾向」を映し出しているのだとしたら、それは社会のあらゆる面でグローバル化が進行する現代にあって、日本の将来を担う世代の国際競争力の問題につながる可能性があるからだ。内外の歴史を振り返れば、社会や国の枠を超えて外の世界に飛び出していった若者たちが社会を変え、国を動かしている。幕末の長州ファイブや新島襄らは大きなリスクを冒してまでも海の向こうを目指した。そして近代以降、多くの若者が海外での異文化体験・見聞から革新的な思想や視点を国内にもたらし、技術、文化、芸術などのイノベーションを生んだ例は多くある。一方で貧困や社会格差が深刻な問題となっている国・地域への旅は、自らが育ってきた日本社会の物質的豊かさやそれを支えるグローバル経済の光と影への気づきをもたらすかもしれない。それを思えば“若者の海外旅行離れ”という

現象には看過できない社会問題としての一面が潜んでいる可能性がある。

第三に、「外に向かわない内向きの若者」の登場は我々が生きる日本社会の内側で、何かこれまでにない変化が生じつつあるサインであると考えられることだ。若者は若者ゆえに、未知の世界への憧れと挑戦心を持つ。その若者が今「若者らしくないほどに」内向きで冒険を忌避する傾向を帯びているのだとすれば、それは彼らが育ってきた社会、そして現在の環境にその原因を求めることができるのではないか。既に出来上がってしまった大人世代以上に、若者が社会のあり様を敏感に映す鏡であるとしたら、“若者の海外旅行離れ”は水面に現れた氷山の一角にすぎないのかもしれない。水面下ではより本質的な変化が若者のあいだで起きており、その変化は彼らを育ててきた社会そのものの構造的変化がもたらす作用ではないだろうか³。

このように“若者の海外旅行離れ”は、旅行業界だけの問題でも、観光研究者だけの問題でもなく、より広範な社会の構造変化にまでその遠因を辿らねば深層・真相を解明できない問題であるのかもしれない。

3. “若者の海外旅行離れ”× 観光行動研究

この問題を解く先陣を切ったのは、世代論による論評である。原田(2010)、岸本(2007)山岡(2009)らは、旅行をしない若者の特徴を世相との関連や彼らが育ってきた社会環境の影響から説いた。また、社会学者の山口(2010)は海外旅行に関心を示さない若者は、旅先での消費に関する情報に偏重した旅行ガイドブックやコストパフォーマンス重視の旅行商品の蔓延を通して、観光産業自身が作りだしたものであると指摘した。すなわち、社会学—世代論アプローチでは、前節の「第三に」に呼応するかたちで“若者の海外旅行離れ”を個々の若者の問題ではなく、彼らを取り巻く社会との相互作用の問題として再構成し解説しようとしたのである。

一方で、すべての若者が海外旅行市場から消えたわけでは、もちろんない。若者たちは社会や時代の空気から影響を受けるわけだが、それをどのように受け止め行動するのか、その反応は必ずしも一様ではない。たとえ同じ時代に生き同じ社会に属していようと、個々の若者にはそれぞれの感じ方があり、それぞれ少しずつ異なった行動を取る。“若者の海外旅行離れ”を読み解くためには、同時代に生きる同世代の人びとの共通性ととともに差異性を考慮に入れた視点が必要であるがゆえに、社会学—世代論アプローチを補完する方法論として観光行動研究のアプローチが有効なのではないか。

観光行動研究は、旅行する人びとの行動やその背後にある認知的プロセスについて、個々の人びとの考え方や行動の異質性と同質性の度合が集積し、全体(たとえば海外旅行市場)の傾向を形づくるという見方をベースにしている。よって、データ収集は個々の人びとの行動や認知のレベルで行われ、そのデータの積み上げとして構成される全体の構造と意味を理解しようとする方法論である。

さて、これまでの観光行動研究においては、「なぜ旅行に行くのか」「旅行実施までにどのような選択をするのか」など、あくまでも旅行すること(=観光行動をすること)を前提とした理論構築がなされてきた。一方、「なぜ旅行をしないのか」という視点からの理論研究は2000年代に入ってようやく欧米の研究者の間で端緒についたばかりである⁴。“若者の海外旅行離れ”研究は「なぜ若者は海外旅行に行かないのか」を明らかにすることであり、この解を探る作業は観光行動研究に抜け落ちていた上記の問題に光をあてることになる。この問いは逆説的に「旅行に行く人びとは何故行くのか」という、観光行動研究の原点となる命題をこれまでとは異なる角度から問うことにも繋がっ

ていくのではない。

さらに本研究は、“若者の海外旅行離れ”が物語る日本社会の変化を考察するために、社会学一世代論のアプローチを補完する役割としての観光研究の意義も視野に入れている。本稿においては次項で述べるように、全体研究の一部を成す質的研究による調査から得られた知見について報告する。

4. 観光行動研究×質的研究

観光行動研究における一般的な研究デザインは、他の社会科学分野の研究手続きでよく見られるように、仮説生成から仮説検証を経て、結論に至るプロセスをとるものである。著者の一連の研究では、なぜ若者が海外旅行に行かないのか、どのような要因が若者を海外旅行から遠ざけているのか、或いは、海外旅行に行く人はどのような考えを持っているのか、といった行動の背後にある認知的なプロセスを明らかにしてきた。この認知的プロセスに介在する構成概念(construct)の生成作業で質的研究を用いた。後述するように、この作業はデータに立脚して(grounded)概念を掘り起こすという、質的研究の一手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach：以降 GTA と表記)を用い、実際に現代の若者の生の声をデータとして収集・分析した。そこから立ち現われてくる概念を手掛かりに“若者の海外旅行離れ”とはいったい何なのかを探っていく。すなわちGTAは個々の事例やデータから推論を導く帰納的なアプローチである。

一方、質的研究と同時に並行で先行研究の精査が行われた。先行研究のレビューは既知、或いは一般法則から個別事例を解く演繹的なアプローチである。この2ルート(図1参照)から構成概念間の関係性を仮説化したのが図2の「海外旅行の実施頻度に関する動態的循環モデル」である。本モデルは量的データによって実証を実施している(実証結果については2014～2015年に刊行予定)。このように、本研究では質的研究と量的研究を研究の両輪として相互補完的に使い分けている。

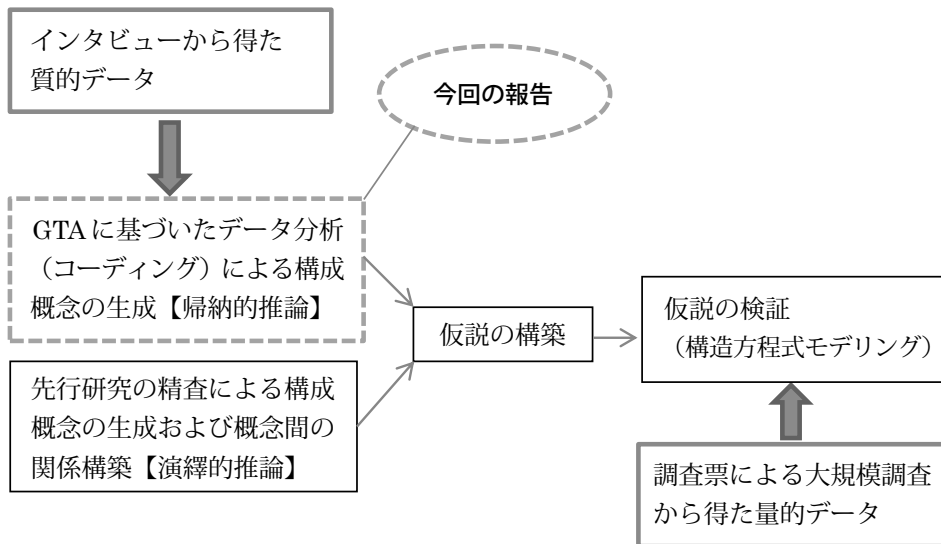


図1 研究全体のモデル図

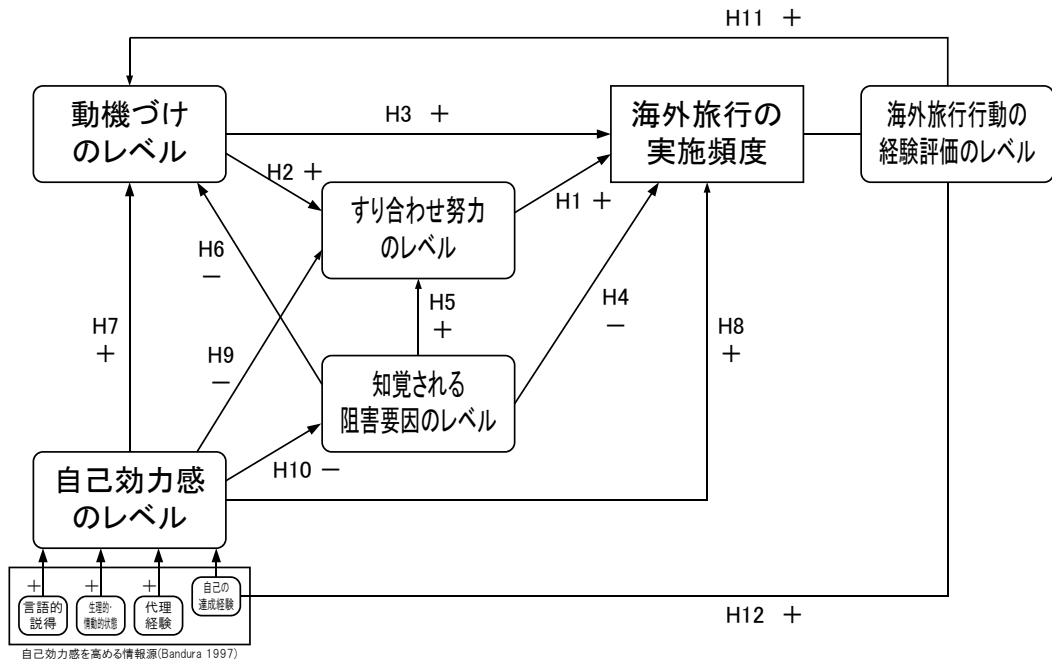


図2 海外旅行の実施頻度に関する動態的循環モデル(西村・高井・中村 2014: 350)

質的研究は「あまりよくわかっていない現象」を理解しようとするときに適したアプローチであると言われており(西條 2007)、仮説検証よりも仮説生成と相性がよい。海外旅行によく行く、と言われていた日本人の若者が最近あまり海外旅行に行かなくなった、という「あまりよくわかっていない現象」を解くための「とっかかり」としてふさわしいものである。

質的研究の出発点はポストモダニズムの分析枠組みと密接な関係がある。近代以降の世界では人々のライフスタイルや価値観が多様化してきたために、従前の社会的枠組みや通念、或いは社会の構成員が暗黙のうちに承知している「大きな物語(マスターナラティブ)」が通用しない状況が生まれた。このような多様化された世界における現実を理解し、マスターナラティブでは解くことできないローカルな文脈と意味を明らかにするための方法論として質的研究が発達してきた。

そのため、繰り返しになるが、この点において質的研究は本研究との相性がよい。なぜなら、現代の日本における“若者の海外旅行離れ”現象は例外的な状況だからだ。海外旅行をしようとしないう若者の存在という現実、それまでの日本の観光状況におけるマスターナラティブに存在しなかった現象であり、若者が外に向かって開いていないことは近代以降(もしくはそれ以前から)の日本人の通念に反する状況なのである。

以上のことから、次節で述べる「若者の生の声」とその分析は、“若者の海外旅行離れ”に関する仮説を生成するための作業、すなわち、本研究を進めるうえで核となる諸構成概念を模索する試みである。

Ⅱ．若者の生の声を聞く

1. インタビュー調査の役割と方法

本研究の帰納法ルートで用いられた質的研究では、質問紙調査で収集する量的データでは把握しきれない若者の「実感」をインタビュー調査から得、そのデータをGTAに基づくコーディング⁵によって分析した。

質的調査では、若者が海外旅行に行く理由(動機づけや目的)と行かない理由(阻害要因)を探ることを中心にインタビューを実施した。また、海外旅行未経験者が初めての海外旅行を体験することによって生じる認知変化を探るため、可能な場合には同一人物に対して事前・事後のインタビューも実施した。一連のインタビューは半構造化インタビューの手法を用いて実施された。

これらのデータは、質問紙調査で扱うような予め項目として用意した枠の中には収まりきらない、若者の実感が溢れだした会話の記録である。そこに埋め込まれた様々な意味をコーディングによって再構成し、“若者の海外旅行離れ”を巡る諸概念として取り出していく。本稿では紙幅の関係上、コーディングの初期段階であるオープン・コーディング(open coding)での作業について記述する。

調査の概要は下記の通りである。

- **調査対象と時期**：国内に居住する18歳から29歳までの日本人12名に対して2008年から2011年にかけて実施。
- **調査対象の選定**：調査対象の選定にあたっては、インタビューの実施を容易にするため(調査対象者がより本音で語ってくれるようにするため)、既に顔見知りであることなどを基準に、インタビューに応じてくれる相手を選定した。但し、インタビュー対象者に多様な属性の若者が含まれるよう、年齢、性別にできる限りバラツキがでるよう配慮した結果、12名の対象者の性別は男性5名、女性7名、職業は大学生10名、社会人2名となった。内、3名については初めての海外旅行経験の前後に2回のインタビューを実施した(表1)。
- **調査方法**：フォーカスグループインタビュー(以降、FGIと表記)および対個人の半構造化インタビューを実施した。調査対象者の同意を得た上で、ICレコーダーに会話を録音し、テープ起こしを行った。これまでの海外旅行の経験内容と評価、海外旅行に対する感じ方、海外旅行をためらう理由などについて、なるべく話し手が自由に話せるように進めた。インタビューは著者と共同研究チームのもう1名(西村)が分担して行った。
- **データ分析**：今回の分析ではGTAの考え方に基づいたオープン・コーディングをインタビューデータに対して行った。個別のインタビュー対象者の海外旅行に関連する経験と認知を中心に以下の要領で分析を行った。
 - ① ICレコーダーで録音されテープ起こしされたデータを精読し、研究目的に照らし合わせてコメントを加える。
 - ② コメントをもとにコードの生成を行う。
 - ③ インタビューごとにトピックやコードを用いて、語りを図式化(モデル化)する。
 - ④ コードからカテゴリーを生成する。

表1 インタビュー対象者の一覧

	インタビュー時期と担当者	形態	仮名	当時の属性
1	2008年6月・高井	FGI	Aさん Bさん Cさん	大学3年生 女性
2	2008年12月 2009年2月・西村	事前・事後の半構造化インタビュー	Dくん	大学4年生 男性
3	2009年2月・西村	半構造化インタビュー	Eさん	大学4年生 女性
4	2009年2月・高井 3月・西村	事前・事後の半構造化インタビュー	Fくん	大学4年生 男性
5	2009年7月・高井	半構造化インタビュー	Gくん	大学4年生 男性
6	2009年7月・高井	半構造化インタビュー	Hさん	大学3年生 女性
7	2011年1月・西村	半構造化インタビュー	Iさん	社会人・女性 既婚子供なし
8	2011年1月・西村	半構造化インタビュー	Jくん	大学4年生 男性
9	2011年1月と2月・高井	事前・事後の半構造化インタビュー	Kさん	大学3年生 女性
10	2011年11月・高井	半構造化インタビュー	Lさん	社会人 男性・独身

次節以下では、主題の異なる4つのインタビューを取り上げ、若者の言葉を基本的にそのまま用いながら⁶解釈を加えていく。

※注 以下の記述において、波線部分はコードを表している。また、紙幅の関係上、インタビューデータの重要部分すべてを掲載できないため、図中には本文で引用のないトピックやコードも一部含まれている。

2. フォーカスグループインタビューで阻害要因を探る

一連のインタビューはFGIから開始した(2008年6月)。FGIではインタビュー対象者が複数のため、お互いの発言がきっかけとなって発話が進む創発性の利点がある一方で、会話が主題から離れてしまう危険性もあるため、調査者は自由な発言を促しながらも適度に介入しながら会話を進めていった。

FGIの対象者は大学3年生(当時)の女性3名である。内、1名(Bさん)は海外旅行経験ゼロ、Aさんは1回、Cさんは2回の経験がある。

「みんなにとって海外旅行ってどう？」という質問からFGIを始めたところ、最初に出てきたのは「大学生は忙しく時間がない」というトピックである。

ゼミ・インターンシップ・アルバイト…

Bさん：(海外旅行には)まだ行ったことない。大学に入ったら行けると思っていたのに、部活に入ったらまとまった時間がとれなくて、チャンスがなくて今日に至るって感じで。本当は8月から9月にアメリカに留学したかったんですね、で行くなら3週間は行きたかったんだけど、冷静に考えると現実的に3週間はいけないうえ。部活もゼミもあるし、インターンシップもやりたいし。

Aさん：私も部活入ってるので時間もないし。お金はバイトすればいいことだからどうにでもなるけど、

まとまった休みがないんですよ。

Bさん：結構アルバイトに縛られた生活してる人が多くて、週に何回は絶対出なきゃいけないとか、お休みもらうにも一苦労、みたいな。

部活動、ゼミナール活動、インターンシップなど、大学に関連した活動に多くの時間が割かれる一方で、アルバイト先の事情によってはなかなかまとまった休みが取りにくいという現実が語られている。FGIに協力してくれた3名は勉学にも遊びにも熱心なタイプのエネルギー豊かな学生達という印象を持った。現代の若者がみな彼らのようにアクティブではないだろうが、「時間がない」という現代の「大学生の忙しい生活」の一端が窺われる。

次に、日本人にとって海外旅行を阻む心理的(個人的)不安要因として強く作用すると考えられる言語の問題(内閣府政府広報室 2004)について聞いてみる。2回の海外旅行を既に経験しているCさんは以下のように語っている。

頼れる人・辞書・勇気

Cさん：イタリア行ったときは、イタリア語なんて話せるもんじゃないと思ったから、とりあえず、(同行する)おじさんが英語話せるからその人にまかせっきりだったんですよ、それでいいやと思って何にも勉強せずに行きました。でも電子辞書は持っていったんですよ。けど、オーストラリアに行ったときはホームステイだし、一番の目的が生活体験と英語だったので、行く前1ヶ月くらいは英会話の勉強はちょっとはしました。けど、やっぱり怖かった。最初は。行った日は、来なきゃよかったって思ったんですけど、こんなんじゃ来てる意味ないって思って、何でもいいから話せばわかってくれるって思って、むこうもすごくいい方だったんで色々話しかけてくれて、徐々に話せるようにはなったんです。よかったかな、って。

不安材料になる言語については、あらかじめ準備していく(勉強や電子辞書持参、或いは頼れる人に同行する)とともに、現地では「何でもいいから話せばわかってくれるって思って」勇気を出して話しかけていく、という方略が語られている。不安を感じる状況について、あらかじめ準備することで解決しようとする行動は、レジャー活動の阻害要因研究で「すり合わせ(negotiation)」(Jackson, Crawford and Godbey 1993)と呼ばれる概念に該当する。また勇気を出して行動を起こす状況、或いは「自分はある行動をうまくやることができる」という自信はBanduraらによる社会的認知理論の中心概念である「自己効力感(self-efficacy)」(Bandura 1986)に近い概念であろう。この「すり合わせ」と「自己効力感」に相当するものは他のインタビューでも若者たちが繰り返し口にしたものだ。

ここで、当時メディア等で話題となっていた「インターネットで体験すれば(海外に)行かなくても十分と若者は感じているのでは」という風潮(山岡 2009, 原田 2010)について尋ねてみたところ、彼らは「インターネットでOKはあり得ない」と考えている。

ネットの情報は海外旅行の代替にはならない

Cさん：ぜったいあり得ないですよ。ぜったい。それはなしだと思う。手とか足とか全然動かしてないの

に、ネットで書いてあるからこうなんだろうな一、なんて絶対ありえないと思うんですよ。いろんな不安な体験とか楽しい体験とか、すごいことでも日本では味わえないようなことが、大げさにわかるっていうか、それはネットでは味わえないから。

調査者：それは海外に行ってみてそう思った？

Cさん：そうですね。最初は憧れだけでこうなんだろうな一って思ってたけど、行ってみたら全然違うんですよ。やっぱり体験しなきゃだめだなんて。

FGIに参加した3人は海外旅行に対して肯定的な感情を持っているようだが、周囲には否定的な感情を持っていたり、無関心な友人たちもいるという。

否定派の友人の事情

Bさん：友達のなかにも海外には行きたくないって子はいますよ。怖いから。

Cさん：あ、それはいるよね。絶対いやだ、って子。ひとりで行く意味がわからないって。

Bさん：みんなでも行きたくないって、修学旅行海外はいやだよ、って言ってる子いるからね。そういう人いっぱいいるんじゃないかな。

Cさん：行ってもいいけど、日本人がいっぱいいるハワイとか、そういう慣れてるところしかいやだ、って。

Bさん：海外行く前に日本じゃない？っていうひと沢山いると思うんですよ。時間ないし、近くで国内にいいところあるんだったら国内でいいじゃん、ってなって、そっちに行くんじゃないかな？

Cさん：みんな疲れてるんじゃない？癒されたいから温泉でいいや、みたいな。海外に行ってもまでそんなにしてどうするんだ、って。

調査者：じゃ、海外に行くにはパワーがないと行けない？

全員：うん。それは確かにある。

Bさん：ぜんぶおまかせならいいんだろうけど、せっかく海外に行ったら何かしなないともったいないみたいな。言葉も通じないし、習慣もわからないから、そういうこと考えて行くぐらいだったら、ゆっくり国内でいいかな、みたいなだと思ってるんですよ。

今回のFGIでは海外旅行否定派や無関心派の声を直接聞くことができなかった。ただ、上記の会話に出てくるような「怖い」「疲れ」や「海外はしんどい」といった実感が一部の若者のあいだで蔓延しているのだとすれば、これらの若者は旅行に冒険や発見といった自己開発性よりも専ら癒しだけを求める「内向き志向」を代表する者たちである可能性がある。但し、今回のインタビューでは否定派や無関心派の声を直接聞いたわけではないため、海外旅行に関心を示さない若者の実感については、引き続き慎重に検討していく必要がある。

海外旅行に行く人が周囲にいるかいらないか

Cさん：私の身近なひとで行きたくないって人は、私が行ったから初めて「海外旅行もあるんだな」って考えたらしいんですけど、たぶん、私がいなかったら考えなかったと思うんですよ。そもそも「海外旅行に行く」っていう考え自体がないっていうか。危ないとか何とかの前に考えがない。

Bさん：私はおじいちゃんがお仕事で毎年一回は色々なところ行ってたんですよ。そういう話とか写真とか見せてもらうまで、海外旅行には周りのひとが行ってなかったから、あんまり憧れもなかったし、海外旅行に行くって概念すらなくて、おじいちゃんが行くようになって初めて「海外旅行ってこういうものなん

だ」って、初めて気がついたんですね。周りにそういう人がいなかったら、あんまり意識しないんじゃないかな。周囲に海外旅行行く人がなくて、そういう考え方がなくて、行くほうが珍しいっていうか、そういう生活環境の人もいと沢山いると思うんですよ。

Cさんの周囲の友達はCさんの海外旅行経験を通して、意識が変化しているようだ。そもそも「海外旅行に行く」という考え自体がないという認識が一定の若者の間に存在していることを、日本の観光産業関係者、観光研究者ははっきりと認識する必要がある。これまでの日本の海外旅行市場の主役であった若者の認識が大きく変化していることになるからだ。

一方、Bさんは海外未経験であるものの、関心は非常に強い。海外体験のある家族の存在が海外旅行を「身近なもの」「自分も行けるもの」と感じさせている。このような「(身近な)他者の経験」がきっかけとなって認知が変化し、行動に繋がっていく働きは社会的認知理論の説明によれば「代理経験」を通した「自己効力感」の高まりであると説明できる(Bandura 1997)。逆に、だからこそ、海外経験者が身近にいないために「自分が海外に行くなんて思いつきもしない」ような、海外旅行に無関心な若者の気持ちがBさんにはわかるのだろう。

FGIの内容を図3にまとめる。

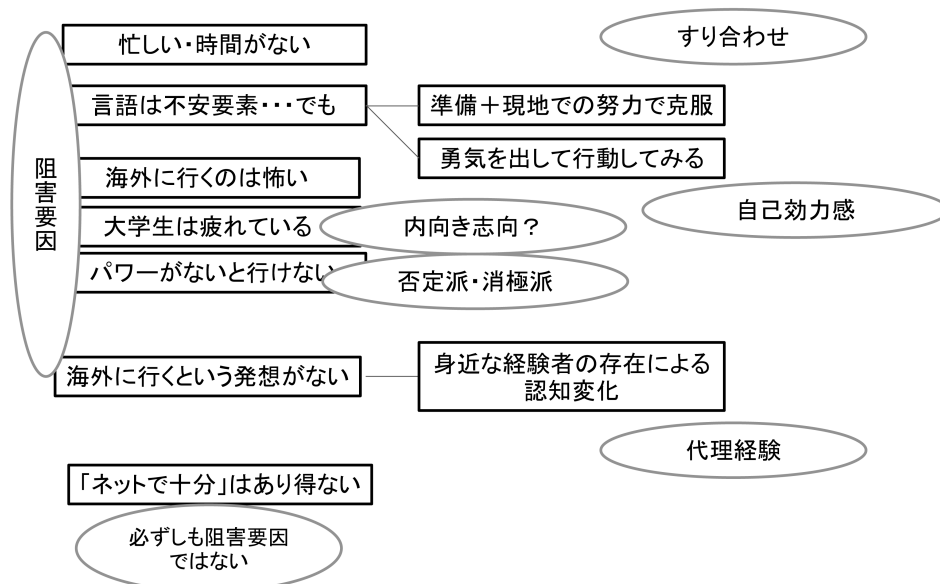


図3 FGIのまとめ

3. 行きたそうで行かないJくんのストーリー

FGIでは会話が弾みやすく、色々な話題が豊富に飛び出すため、複数の人びとの認知や経験が折り重なるようにして語られる。若者に共通しそうな様々な概念を拾い出すには適している一方で、個々の若者の生き生きとした経験あるいは、一貫性を持つ意味あるストーリーを取り出すには一対一のインタビューがより適している。

そこで次に、大学4年生(当時)のJくんのインタビューを紹介する。Jくんはまもなく卒業を控え

た大学4年生である。海外旅行経験は高校生の修学旅行で行ったタイのみだが、その経験を「とても楽しかった」と感じ、「もっと海外に行きたい」「きつと行くだろう」と思い続けているにもかかわらず、インタビュー時点では足踏み状態のままである。その最大の阻害要因としてJくんが挙げたのが「時間がない」「同行者がいない」であった。しかし、その根底にはJくんの大学生活の「中心」を成すサークル活動の影響があるようだ。そのサークルはメンバーが100名を超える大所帯で、彼はその役員などを務めるリーダー的存在である。

サークル中心の大学生活

Jくん：単純に言うと、結構自分の大学の中でサークルが、こう大きいウエートを占めてきまして、それとの取捨選択で、「行こう」と言っていたことも、ちょっと断らざるを得なくなったり、あと、ほんとに予定が、空かなくなってきたりしてたので、実際その、お金もたまらなくなったりしてたまま、3年生の終わりぐらいまで来てしまっただけで今度は暇ができてきた4年生になってみると、周りに行く人がちょっと少なかったりしたのもあって、結局踏み切らなかったまま、今に至ります。

限られた時間を何に使うのかと言う優先順位の問題が語られ、海外旅行よりもサークル活動を優先させてきた4年間を振り返っている。お金が貯まらなくなったことについては、サークル活動のために定期的なバイトを断念したことが原因だったようだ。

一度、1年生から2年生になる春休みに、かなり具体的な海外旅行計画(ヨーロッパ旅行)が友人間で持ち上がったのだが、予約の直前になってJくんはその話から脱落している。

時間を巡る優先順位

Jくん：「どれぐらい行くの？」って聞いて、「1週間でちょうどちょっと短く感じるぐらいじゃない？」って言われたんで、特にそこに僕の意見はなかったんですけど、確か1週間で、もうちょっと行ったのかな、結局彼は。

調査者：その1週間を空けるということが、難しくなっちゃったっていうのは？

Jくん：サークルをやったんですけど、そこの春休みだったんで、ちょうど新入生の歓迎の準備を、僕中心でやっていかないといけなくて、連続して1週間空けるっていうのが、ちょっとその、できないような状況にあるサークルだったので、できませんでした。もう縛られてるっちゃ縛られてると。その2年間ぐらい。

調査者：もう中心の活動になっていったと。

Jくん：はい。取捨選択の部分で、海外旅行よりサークルに、その1週間空けずに行くってことのほうを選んだっていうことです。

ここでも時間に関する優先順位のエピソードが繰り返されている。一方、「同行者がいない」という阻害要因について、もう少し見てみよう。

周囲に海外旅行積極派がいない

Jくん：もう1つの原因として、周りの男子の友人が、大学生にしては珍しく、海外熱がない子たちだったのもあって、その話が会話として出にくかったなっていうのがあると思ったんですけど、基本的にはで

もやっぱり周りの親しい人たちがなぜかあんまり言わないのもちょっと影響してたなって思います。サークル、女子のほうが多いんですけど、うちの代とかも、今すごい遊びに海外に行ってる、それぐらいの感じになると思ってたんですけど、もうちょっと、その旅行に今行くことには否定的なぐらいになったんで。その男子の仲いい子たちが。否定的。だから行かない、誘わないってわけじゃないんですけど、何か、そ、そっかぐらいの感じになってます、今僕らの中では。

Jくんの話によく登場するのが「男子の友人」たちである。後々の会話から、彼らが同じサークルの同期の男子であることが判明するのだが、Jくんにとって彼らは強い仲間意識で結ばれていることが窺われる。そして、どうせ海外旅行に行くなら全員で行った方がいいとJくんは考えていたようだ。以下はインタビューの一番最後に登場する発話である。

仲間全員一緒にないと行きづらい

Jくん：誘う、誘わないのところで、自分が思ってたのは、何かこう、一緒に行く人がいなくて、例えば仲いいのが、サークルとかだと、そのサークルの中で2人とか行けないのが、僕の中で阻害要因になってるなって、今、さっき思ってた。

調査者：えーっと、もっとみんなで行かないといけない？

Jくん：いけないみたいなことです。それが嫌、嫌なんです。A君、B君、C君、僕がいて、A君とはすごい、ほんとに誘えるんですけど、その今の状況で、何かA君だけ誘うのも、せっかくB君とC君も一緒に4年間やってきたのになんていうのとかがあって、今誘ってないなってさっき気付きました。

調査者：なるほど、なるほど。

Jくん：だから、誘わない。誘ってまで行かないのはそこにあるんだなって、さっき。

調査者：A君だけを誘うことによって、それによって生じる影響みたいなことを。

Jくん：はい。すごく気にしてる。

同行者が介在する阻害要因として、「同行者がいない」ことが海外旅行をためらわせているのではなく「一緒に行きたい複数の相手全員」と行くためには調整が難しい、ということだと解釈できそうだ。「一緒に4年間やってきた」仲間との関係を重要視するJくんの姿は、「絆」「つながり」が現代の若者の価値観の中核を成している状況をうかがわせもする。さらに、Jくんは同行者について「本当にリラックスできる相手」でなければイヤだと感じている。

誰と行くかが重要

調査者：例えば、誰か都合が合う人がいれば、卒業までの間でも、行きたい？

Jくん：あ、行きたいです。はい。

調査者：けど、それが現実的になっていかないのは、一緒に行く人の問題が一番大きい？

Jくん：そうなんです。何か多分誰でもいい、いいわけじゃないと思うんですよ、旅行、海外旅行なんです。何かここが僕のわがままなところっていうか、もうみんなそうだと思うんですけど、やっぱりこの、海外旅行とまでいくと、ちょっとこう、ほんまにリラックスできる人と行きたいのかなあって思いました。

Jくんは自発的な海外旅行は未経験であるにもかかわらず、「海外旅行だからこそ、本当にリ

ラックスできる相手』と行きたいという希望を強く持っており、未だ経験したことのない自発的な海外旅行、つまり修学旅行のような他律的な旅行ではない海外旅行での状況について想像を巡らし、適応する準備をしているようにも読める。

ところが、海外旅行にまつわる不安については違ったトーンの発言をしている。

不安以前の問題

Jくん：(トラブルなどが)「起きたら怖いから、俺いいわ」ってなるかっていう質問ととらえたら、そんな僕、別にそういうのは、考えてないと思うんです、やっぱり。お金とか、今の目の、目先のことしかあんま考えてないなと思いました。時間とか、一緒に行く人とか。伝染病に至っては、あの、ま、誰でもそうだと思うんですけど、自分がかかると思っていないで、不安にすら思っていないです。不安は感じるか、感じないかでいうと、感じますけど、やっぱりそれが原因じゃないなあって。

調査者：それが原因じゃない。

Jくん：もっと手前のところに僕は止まっちゃってるなあっていうのを感じました。

調査者：もっと手前というのは？

Jくん：っていうのは、自分の今のお金ですとか、今までの経験と照らし合わせても、お金が今ないからとか、えーっと、あ、一緒に行く人がいないとか、そうですね、予定とかですね。

Jくんにとっては、お金、時間(予定)、同行者といった、いわば外的な要因が立ち塞がっているために海外旅行に行くことができないのであって、不安という内的(心理的)な要因については、まだ想像するには至っていないといったことになるだろうか。本人の言葉で表現するなら「不安を感じるもっと手前のところに僕は止まっちゃっている」ということになる。つまり、海外旅行の阻害要因には色々な種類のものがあるとしても、それらには順序性のようなものが存在する可能性があり、まず海外旅行に行くための必要条件とも言うべき「お金・時間・同行者」が揃ったうえで、「それでも不安」だから行かない、といった状況が示唆されているとも言える⁷。

心理的な不安をあまり感じていないことについては、高校生のときの海外修学旅行での経験も影響を与えているようだ。

不安より楽しさ

Jくん：不安ですね。〇〇くんとかは、彼は、スリに遭ったとか聞くんじゃないですか。友達とかもやっぱり、10万の何かなくしたとか言って、「よくお前平気だな」って言ったんですけど、女の子で。もうそんなの聞いたら、不安ですよ。あとそばアレルギーの人が、向こうで食べて、救急車呼んだから十何万とか取りますよね、向こう。そんなのが不安です。

調査者：じゃ、もう、もう一生行きたくないとか？

Jくん：はならないですね。

調査者：ならないんですね。ならないんですね。

Jくん：何かそんなのは全然。ま、さっきのネガティブ、ポジティブの話になりますが、ポジティブなんで、やっぱり。

調査者：それは何だろう。行けば何とかなるって思ってるのかな。

Jくん：あ、そうです、そうです。多分そうです。行けば何とかなるし、多分僕の中では、その、楽しさ

のほうが絶対あるだろうという、ふうにも見てるんですね、多分。

調査者：それ何で？

Jくん：楽しかったからじゃないですか。

一度だけの海外体験である高校の時のタイへの修学旅行が楽しかった、という経験が「行けば何とかなる」という自信につながり、さらに将来の海外旅行に対する不安を軽減しているようである。実際の体験が持つ力が働いている。とはいえ、Jくんは現実には、なかなか海外旅行に行こうとしていない。過去の海外修学旅行で味わった楽しさだけでは、自由意思で海外旅行に行くだけの原動力とはならないのだろうか。

インタビュー後半でもう一度海外修学旅行についての話題になったときに語った次のエピソードにヒントがあるかもしれない。

枠のなかでの海外体験

調査者：修学旅行のときはやっぱり学校で行ってるって感じ？

Jくん：そう。感じ。もう気にしてないですね。自分で行ったとか、1人で行ったとかじゃなくて。ほんとに何か北海道に行くっていうのと一緒にの感覚で、そうですね、修学旅行っていう枠があったからなのかな。ま、何も考えてないですね。いや、でもほんとにそういう感じなんで、何も感じてない。

何も感じていない、という最後の発言は調査者の発言にある「自分で行った感」に呼応するもので、自分で海外旅行に行ったという達成感や、そんな自分に対する自信という文脈での「何も感じていない」であろう。一方、「何も考えていない」という発言は、修学旅行という「枠」のなかでの海外経験であったことを振り返り、自分で何かを決めたり実行したりする機会の少ない海外旅行であったことを指しているようである。このような状況はMindlessnessと呼ばれる心理状況に近いと考えられる。Mindlessnessとは端的に言えば思考停止の状態である。自ら情報を処理し判断を行い行動を律する状態であるMindfulnessの対極にあり(Langer and Piper 1987)、Jくんが経験した海外の修学旅行では、学校が準備した枠のなかで自ら意思決定をすることのない状況で体だけが移動をしている状態と言えるだろう。

過去の海外旅行を「楽しかった」「行けば何とかなる」と感じている一方で、修学旅行という形態による海外体験ゆえの、一種の限界を客観的に評価している。自由意思で参加し、そこで良い経験をする、という達成感がなかったために、Jくんは「楽しかった、また行きたい」と語りながらも、実際の行動には結びつかないのかもしれない。もしそうであるとするならば、近年観光産業が力を入れている「旅育」の一環としての海外修学旅行は、必ずしもその後の自発的な海外旅行への志向を育成していない可能性もありそうだ。

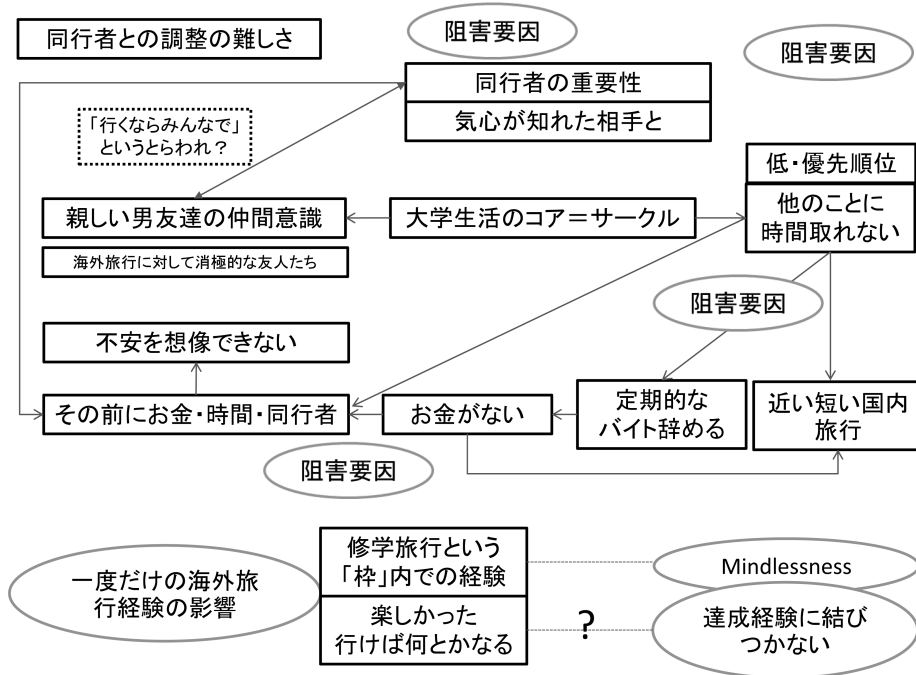


図4 Jくんのモデル図

4. 初海外体験で認知が変化したFくんのストーリー

Fくんは大学を卒業する直前、4年生の3月に初めての海外旅行を経験した。サークルの友人3名とともにパッケージツアーで台湾3泊4日の旅だった。街歩きやローカルな食事、買い物などの場面で、海外旅行ならではの体験をし、今後もし海外旅行に行きたいと思うようになった。しかし、その初体験までは複数の阻害要因を強く感じていた状態だった。Fくんが初の海外経験前にどのような阻害要因を感じていたのか、そして、海外旅行を経験したあと、どのように認知が変化していったのかを見ていきたい。まず、海外旅行計画が本格化していなかった時期に行った(初海外旅行の)事前インタビューからFくんの声を紹介していこう。

難しい同行者との調整

Fくん：友達とも、まあ実は行こうかっていう話をしてたんですけど、なかなかこう話が進まなくて、なかなかみんな日程が合わないっていうのもありますし、今度お金がないって言い出す友達もいますし。みんななかなか腰が重いみたいなんです。じゃ、もうここでもいいじゃんって誰かが言うとか、でもお金が高いとか、値段高いとか。じゃ、この日に行こうよっていうと、予定があるとか。なかなか噛み合わない部分があつて。

Fくんは大学で自転車サークルに所属し、これまでに日本国中を友人と、あるいはひとりで、比較的ハードで長期間の自転車旅行をしてきた経験を持つ、国内旅行に関してはかなりのベテランと

言ってよい人である。しかし、海外旅行となるとひとりで行くという自信はなく(後述)、必然的に同行者が必要になってくる。Fくんの語りでは「同行者」との「お金」「時間」にまつわる調整が上手くいかないことが、海外旅行実施に向けての阻害要因として挙げられている。

お金に関する優先順位

Fくん：あの、やっぱり新生活が始まったら車が欲しいかなっていうふうに思ってたんで、そのためのお金ですとか、あと、海外旅行のほかにも国内一人旅したいなっていう、、まあそうですね、費用なら、まあ出しても、あの東南アジアかそのへんが限度かなっていうふうに、、時間はいくらでもあるんですけど。

一方、Fくん自身は「時間」はあるのだが、「お金」について他の消費との競合関係のなかで海外旅行にはあまり割くことができないと感じている。これまで愛好してきた国内ひとり旅や社会人としての新生活で必要となりそうな車の購入に比べて、海外旅行は優先順位が低い。

海外ひとり旅には自信がないFくんは、次の「不安」に関連するエピソードで次のように語っている。

海外ひとり旅の勇気はない

(調査者の「ひとりで海外に行く気はない?」という質問に対して)

Fくん：あ、それはなかなか、そんな勇気はないですね。たとえば、出国の手続きどうやったらいいんだろ、とか、飛行機ちゃんと乗れるかな、とか。向こうへ着いてから言葉がまず通じないのが、、まったくあの、どんなところかわからないっていうのも不安。ひとことで言うと不安。

海外旅行に対する不安のなかでも特に外国語でのコミュニケーションについては、かなり強く不安を感じているようだ。英語には自信がないという発話のあとで、Fくんが大学生生活を送った町での外国人との会話の経験について聞いてみる。

外国人は苦手

(調査者の「外国人が多い町だけど、道聞かれたりしたことはないの?」という質問に対して)

Fくん：それはあります。でも、あせってちゃんと答えられなかったり、こう指さしながら、あっちって言う。だからもう普段はできるだけ外国人と目を合わせないようにしながら(笑)。マウンテンバイクで乗って動き回ってるんで、この人だったら道知ってそうだな、って見た目で見られるんです。それで声かけられるんですけど、はい、できるだけ外国人の前は足早で去るようにしてます。

外国語での会話に相当不安を感じているFくんは、もともと海外志向はそんなに強くないようだ。就職内定先は海外への製品輸出を主事業とするメーカーで、海外勤務の可能性が高いが、そのことについてFくんはこう述べる。

追い込まれたら行く

調査者：もし本当に(著者注：海外勤務に)行くなってことになったら、もし選択させてあげるって言われたらどうします?

Fくん：むつかしいですね、でも、、、行くと思います。自分にとって無駄にはならない経験だろうなって思いますし、行けって言うんだったら、やっぱりそれなりの思いがあって行けって言ってくれてるんだらうから、行かなきゃいけない、っていう状況に持ち込まれたらたぶん行くと思います。

Fくんはできることなら海外勤務は避けたいと考えているようだが、状況的に追い込まれたら行かざるを得ないと感じている。また、海外での経験から何らかの学びが得られる、無駄にはならないだろうという意識はある。自分から積極的に海外に出て行こうというほどの動機づけはないが、外部からのきっかけやお膳立てがあれば行ってみよう、というのが本音のようである。ゼミナール旅行で海外に行こう、という話が出たとしたら、という質問に対するFくんの答えは次のようなものである。

誰かに誘ってもらえれば

Fくん：まあ、はい、いいと思います。なかなかそういう機会って、僕みたいに特に腰の重い人にとったら、行こうよって言ってくれる機会ってすごく貴重だと思うんです。みんなで行くんだったら旅なれた人もいでしょうし、不安も少ないと思いますし、もしそういう機会があったら参加してたかな、というふうには思います。

調査者：けれども、自分から積極的に計画を立てて、自ら立てて、っていうところには、、、。

Fくん：それはなかなか、ならないです。

以上のように、Fくんは海外旅行否定派ではないにしても、自分から積極的に障害を取り除いても海外に行こうとする若者ではなく、誰かがお膳立てをしてくれて背中を押してくれたら海外に行きたいと考えている。どちらかという、消極派を代表するような若者であることがわかってきた。

そんなFくんが、この事前インタビュー実施から1か月もたたないうちに海外旅行デビューを果たすのである。一体どのようなプロセスを経て、Fくんは初海外旅行に至ったのだろうか。実は、普段から仲よくしている自転車サークルのグループの中に、積極的に旅行の計画や手配を進めてくれた友人がおり、彼が実質的にすべての段取りを仕切ってくれたことが最大の要因であった。加えて、卒業旅行という大義名分があったこと、就職後はまとまった休みが取れないだろうという、いわば外的な要因による後押しが大きかったようである。

積極派の友人が背中を押してくれた

Fくん：あのときはもう誰も行こうって言い出す人がいなかったんで、もうそのまま話も流れるかなって思ってたんです。でも、忘れた頃に〇〇くんが言い始めて、もうそろそろ予約しないと間に合わないんじゃないって言い始めて。もう、結構直前になって、じゃあ申し込むからどこへ行くっていう話から始まりまして。で、日本語も通じそうだし、値段も安いっていうことで、台湾になったんです。場所決めて予約して、お金払って、チケットもらってきて。それ全部〇〇くんがやってくれました。

Fくんのような、内発的な海外旅行動機のレベルが低かった人でも、こうした外発的で強力な「きっかけ」があれば海外旅行に出かける。同行者との時間のすり合わせや、競合する他の消費との優先順位争いは、こうして克服されたのだが、事前に感じていた心理的な不安についてはどうだった

たのだろうか。

心配し過ぎだった…思っていたより楽

Fくん：海外って結構簡単に来れてしまうんだなって感じました。でも入国カードを書くときに、どんなふうにかいたらいいかわからなくて、そこだけちょっと戸惑いながらも適当に書いて出したら、何も言わずに通してくれたんで。なんかほんとと思ってたよりも楽だなって思いました。

調査者：想像では、どんなんだと思ってたの？

Fくん：入国審査官の人みたいなのと一対一になって、いろいろ中国語でわーっと聞かれて、中国語こいつわからないなと思ったら英語でわーっと聞かれて。それにたじたじになりながら答えるっていう、そんなイメージしてたんですよ。ほんとに、いろいろめんどくさそうだな、ややこしそうだな、ってのがずっと頭にあったんですけど、いざ行ってみたら、思ったより楽しめたんでよかったです。言葉が通じなかったり、文化が違ったりで、いろいろ戸惑うんじゃないかなって思ってた。入国の時からはじまって、例えばレストランで何か頼む時ですとか、ホテルにチェックインするときとか、タクシーに乗ってどこまで行ってくださいって言うのとか。なんかそんなのが全然わからないんじゃないかなっていうふうにしてまして。でも行ってみると、意外と英語とか日本語とか、なんとか通じるってことがわかって。それだけで不安だったんですけど、でも行ったらなんてことなかったんで。もう思いっきり楽しめました。

Fくんの場合、海外旅行に対する「不安」は、例えば入国審査では外国語で問い詰められるに違いない、といったような根拠のない思いこみに基づいていたようである。しかし、実際に海外旅行に行ってみると事前の想像ほど大変ではなかったし、自信のなかった英語に関しても、旅行中の普通の状況下で必要となる語学のスキルはそんなに高度なものではないことにも気づく。海外旅行の前後で阻害要因に対する認知が変化したのである。それよりも、むしろ物足りないと感じた部分もあった。初海外経験が認知を変えた良い例と言えそうである。この部分の会話を見てみよう。

ちょっと冒険もしてみたい

Fくん：(台湾は)日本と似てるなっていうのが、まず感想です。街の雰囲気、街を歩いている人も顔ももう日本人とあんまり差もないですし、建物とかもほんと日本そっくりで。テレビとかやってるのも見ても、日本語のテレビが流れてたりで。それで日本に似てるなって思いました。でも、日本と結構似てて安心してたっていう反面、ちょっと物足りなかったかなっていう気がするんです。まあ、安心したんですけど、逆に全く言葉も通じないし、日本人もいないみたいな環境にもちょっと行ってみたいなっていうふうに、今度思ったんです。できるだけ安心旅行したいと思う反面、ちょっと冒険してみたいという気がするんで。難しいんですけどね。

初めての海外旅行に満足しつつも、よりディープな海外体験への関心が芽生えている。できるだけ安心して旅行したいと同時に、ちょっと冒険をしてみたい、というFくんの発言は興味深い。海外旅行に求める安心感と冒険心のせめぎ合いのようなものが見られ、この葛藤は観光研究の古典のひとつであるCohen(1972)による‘Novelty-Familiarity’概念と符合する。

Cohenによると、旅の本質は日常生活を離れることによる新奇な体験(Novelty)との出会いであるとともに、人は慣れ親しんだ生活からかけ離れた環境に身を置くことによるストレスに対して何ら

かの防御をするために、日常生活に属する世界にあるもの(Familiarity: 熟知性)を旅先にも求めるとしている。旅とはこの2つの両極の体験の組み合わせであり、二者の体験の組み合わせ度合いにより観光者の体験が変化する。Fくんは初めての海外旅行先である台湾で感じた熟知性に安心しつつ、より新奇な体験への思いを膨らませているようだ。

初めての海外旅行でポジティブな経験をしたFくんは、今、海外旅行についてどのように感じているのだろうか。

自信つきました

Fくん: やっぱり旅行から帰って来て、ああやっぱ日本いいわー、落ち着くわーって思ったんで。やっぱり日本に住んでたいなと思います。でも、まあ短期の出張ぐらいだったら行ってもいいかなっていうふうに思いました。ちょっと、自信つきました。意外とこう、海外旅行ってハードル高くないんだなって思って。あと飛行機の乗り方とか入国審査のやり方とかもだいたいわかったんで。言葉もなんとかして伝えようと思ったら伝わるんだっていうのも体験できたんで。それやったらあんまり不安ってないんだなって思いました。

実際に初めて海外に行ってみたら、それが上手くいった、という成功体験を経たことによって、これまで感じていた不安が減少し、海外へのハードルが低くなった。その結果「自信がつけました」とFくんはきっぱりと言い切っている。外国語でのコミュニケーションにおける不安も「やろうと思えばできる」という自信に変わっていた。自己の成功体験が持つ大きな力が再確認できるエピソードだ。この自信は「自己効力感」を高める情報源としての「自己の達成経験」(Bandura 1997)に相当するものと考えられそうだ。もともと国内旅行の経験値が高いFくんにとって、旅行先の選択肢としての国内と海外に対する感じ方には何か変化が起きているのだろうか。

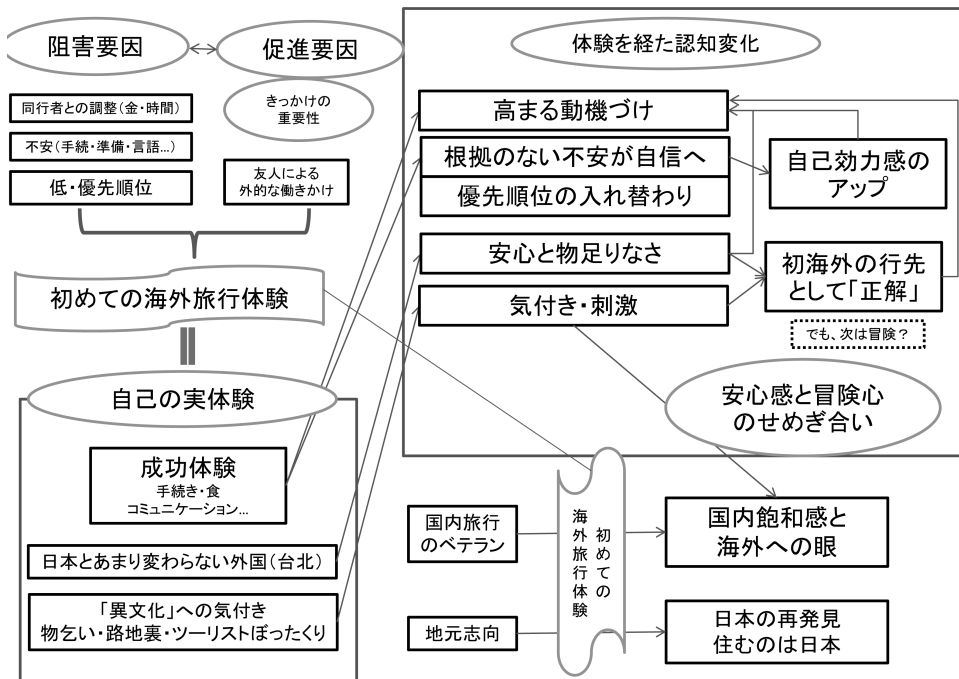


図5 Fくんのモデル図

国内より海外に

Fくん：大体日本中行き尽くしてる感があるんで、国内旅行ってあんまり新鮮味がなくなってきました。旅行っていうのも日常の延長みたいになってきたんです。なんで、刺激がほしいな一と思ひ始めて。そのときに海外へ行って、あー面白いなと思ったんで。なんで今は、国内旅行よりも、海外旅行の方が興味があるっていう状態になってきてますね。おんなじお金あったら、どうだろ、まあ絶対海外旅行を選ぶとは言い切れないですけど、迷うかなというふうに思います。前はもう、車のほうがいいよというふうに言ったかもしれないけど、今はもうほんとに、どっちにしようかなぐらいまできてます。

ここでは、海外旅行初体験を経て限られた時間やお金の配分についての優先順位が入れ替わった様子が語られている。最後に、Fくんは自分の経験を振り返り、認知の変化、自己の変化を確かめている。

障壁が低くなって、もっと行きたくなった

Fくん：やっぱり、いろいろ不安、言葉が通じないとか、そういうのが不安で、それが海外旅行にあんまり行きたくないな一と思ってた理由だと思うんですけど、やっぱり実際行ってみて、そんなに旅行、海外旅行って大変なことじゃないんだなって気づけたことで、まああの、まあ障壁が低くなったっていうか。もっと行ってみたいな一っていう気持ちになりましたね。すごい、海外旅行って結構ネガティブなイメージが大きかったんですけど、それがもう払拭されたんで。

Fくんのストーリーは消極派の若者の背中を押す「きっかけ」の存在の重要性を示している。実際の体験を経て、それがポジティブなものであった場合には阻害要因の力を弱める方向に認知の変化が起これ、海外に対するネガティブな印象がポジティブなものに変わったのだ。つまり、阻害要因とは絶対的な障壁ではなく、個人の感じ方によってその強弱が変わるものであることをFくんの話は示唆している。こうした認知の変化により、海外旅行に行かない若者が「行こうとする若者」に変わっていく可能性が見えてきた。

5. 海外旅行の好循環にはまっていくIさんのストーリー

ここまでで紹介してきたインタビューでは、最初に「若者が海外旅行に行かないのは何故なのか」という、阻害要因にまつわる問いを中心に据えて、そこから展開される若者のストーリーを見てきた。一方、インタビュー調査を進める中で、「では、海外旅行に行く若者はいったい何故行くのだろうか」という疑問が湧いてくる。このクエスションは、本研究の問いに対する答えを逆説的に導いてくれるのではないかと

そこで、最後にIさんのケースを紹介したい。Iさんは12名のインタビュー対象者のなかで、もっとも多くの海外旅行を経験している。Iさんは社会人、28歳の女性で既婚者、子どもはいない。インタビューの時点で8回の海外旅行を経験しており、すべて自由意思による海外旅行である。ひとり旅の経験はなく、学校時代の友人、同僚、家族(母、妹)、夫(新婚旅行)が同行している。初めての海外旅行から6年間で8回経験しているので、平均すると毎年1回以上海外に行っていることになる。若者の海外旅行離れが言われるなかで、逆に海外旅行リピーターであるIさんにとって、海外旅行の魅力はなんだろうか。

どんどん吸収していく感じ

Iさん：とにかくいっぱい見たいんです。何か自分の行ったことないところへ行ったら、絶対発見があるし…。こんなに広いんだって思えるし、何か新しいところに行くたびに、いろんなことが何か感じれるっていうか。…が好きなんです。未知の世界ですよね。何かよく「どこどこ行ってきたわ」みたいな話は聞いたりはしてましたけれども、何か自分で行かないとわからないじゃないですか。話聞くだけじゃ、全然わからないですし、未知の世界だから、自分で行って、知りたいみたいな。見たい、いう感じでした。

これまでの海外旅行で楽しくなかったことは一度もない、と言うIさんは、8年間の海外旅行経験を積み重ねのなかで旅行の流儀を変える転機を経験している。初海外から5回目までは近隣のアジア諸国やビーチリゾートを目的地としたパッケージツアーに参加していたのだが、6回目の海外では高校時代の友人と二人で個人手配旅行による2週間のヨーロッパ旅行に出かけている。

Take Off

Iさん：たまたま私、この時に前職を退職したときで、たまたまこの友達も仕事を辞めた時期が重なったんですよ。で、会ったとき、その話をして。「じゃあ、もう行こうか」って言った2週間後には、もう飛んでました。もう今しかないって、もう2人とも思ったんでしょうね、きっと。もうこんな、こんなはないぞとなって、もう、はい、そこからは早かったです。だから、ちょっとここからは、ちょっと違いますね。

本人が「ちょっとここからは違う」と語っているように、海外旅行経験を積み重ねるなかで、この時点で海外旅行の質が大きく変化したようだ。これまで海外旅行に対してポジティブな経験を重ねてきたIさんだったが、しかし、これまでにない長い旅程、そして個人手配に対する不安はなかったのだろうか。

なんとかなる

Iさん：手探りでしかたけど、何かやってみると、意外に普通にチケット取ったら、勝手に乗ったら、飛行機が連れて行ってくれるし、もう宿も取っておいたら、勝手にもう紙を見せれば泊まらせてくれるし、なんとかなるんだなと思いました。なんとかなるんだなあ。ヨーロッパ間をジェット機で移動するとかも、向こうのサイトで予約して、言葉もほとんどわからないんですけど、何か取れてて、何か乗れてみたいいな。「この通りに行けば大丈夫、この紙さえあれば」ぐらいのテンションで。何かもう友人も解放されて、今なら何でもできる、みたいな感じになってたのもあったのかな。

不安よりもむしろ、はじめての長期間の海外、そして個人手配で行くことへの昂揚感、そして同行者の友人との気持ちの相乗効果もあって、万能感に似た感情が伝わってくる。「なんとかなるんだ」「今なら何でもできる」という発話が象徴的だ。だが、そもそもなぜ6回目の海外で個人手配に切り替えたのだろうか。仕事を辞めた時期で長期間の休みが取れたこと以外には何か理由があるのだろうか。

もどかしい 自分でもできる

Iさん：お互いですね。添乗員さんとかがいて、時間が決められてるし、団体行動ですし、自分の好きなように行けないっていうのが。安心はあるんですけど、それが何かもどかしいというか。自分の目で、ゆっくり見たいところは見たいし、全然関係ない、買い物とかもう全然いいし、もっと景色見たいとか、融通が利くじゃないですか。で、自分らでもできるんだというようなところを含め、やってみようっていうのはありましたね。

個人旅行に切り替えた背景には、パッケージ旅行での経験に対するもどかしさがあった。これまでの海外旅行はすべて楽しかったと語っていたIさんだが、このように見えてみると実は隠れた不満要因があったようだ。自由な旅行をするためにはリスクも自分で背負わなければならない。しかし、この時のIさんは「自分らでもできる」「やってみよう」という表現があるように、そのハードルを越えていこうとする勢いがあった。自分に対する肯定感、自信のようなものが読み取れる。

指さし単語帳

Iさん：タクシー乗り場が本当にわからなくて、ホテルのチェックインまで間に合わないとなったらときも、何とか英語がしゃべれる人に当たるまで、聞き続けるとかすれば。あと友達が携帯を持ってたっていうのは、向こうで通じる携帯。それ、あっ、そうですね、指差し単語帳と携帯がなかったら、多分帰ってこれなかったです。はい。

未知の世界での積極的な行動は、不安な状況にあらかじめ備える(指さし単語帳、携帯)ことによって不安を払拭しようとするすり合わせによって支えられているようだ。

この初めての海外個人旅行経験は、このあとIさんにとっての海外旅行の理想形になっており、海外旅行するなら2週間くらいは行ってみたいと感じるようになる。しかし、再就職、結婚という環境変化により、思ったような海外旅行が出来ない状況が訪れる。新しい職場での休みの取りにくさもあるが、何より最大の阻害要因は夫に関連しているようである。

真の阻害要因

Iさん：もう結婚してしまったんで、経済的なことと、あの、旦那と一緒にいくんだったら、行けるのならいいんですけど、そうでなくて今まで通り友達とてなると、家を長期で空けるのが…。ねえ、ちょっとはばかれるとか。ご飯どうしようと思って。私が多分すごい長い期間行こうとしてるから。2週間とかのスパンで。行きたいなと思ってしまうから、だめですね。うーん。多分本人は「行っておいで」って言ってますけど。うーん、ちょっとねえ、あの、何て言うんですか、あの、後ろめたいっていうのと、ちょっと向こうのお母さんに何て言われるかなあと思うと。

実は夫よりもむしろ、夫の母に対する気遣いが最大の阻害要因になっているようだ。このような制約条件があるなかで、Iさんは2つの方策(すり合わせ)を使って海外旅行に行こうと行動を起こしている。ひとつめは「短くても休みを取る」ことである。土日が仕事で、連続した休みを取りにくい職場に勤めていた時期ですら、なんとかして短い期間でも海外旅行に行こうとしている。

阻害要因があっても何とかして乗り越える気合

Iさん：休みは全然取れないですね。だから、この時2泊3日でギリギリでしたね。休みを取るのに必死な感じで。「行きたい」のために仕事頑張ってきましたね。私の周りは、やっぱり旅行が好きな人が多いかもしれないです。やっぱりみんなどうにかして休みを取ろうとします。仕事をすごい詰めて、もうここまでって決めて、ここまで全部上げて、「じゃあ、行ってきます」という気合の入り方ですね、みんな。はい。どうにか、できるまでにやみたいな。

たとえ休みが取りづらくても、そのために前後が忙しくなっても、そして、たとえ短い期間でも、どうしても海外旅行に行くんだ、という強い意思、「気合の入り方」、強い動機づけがIさんにはあるようだ。そして、周囲の同僚にも同じ傾向があり、そういった条件がIさんの海外旅行への強い志向性を支えている面があるのかもしれない。

Iさんがとったもう一つの方策は海外旅行消極派の夫を巻き込む作戦である。新婚旅行という大義名分を使って、消極派の夫をうまく乗せて押し切っていく。

消極派だった夫への積極的なはたらきかけ

Iさん：半ば無理矢理押し切ってきましたね。「行きたい、行きたい」って。だから、全然乗り気ではなかったです、相手は。勝手に手配して、「じゃあ、いついつ行こう」ってなったんです。もう本当に行く気がないっていうか、もう全然乗り気じゃなかった。「行ってみたら、わかるから」って言ってたんですよ。「もう絶対楽しいから」ってずっと言ってて。そしたら、着いたら、向こうのほうがすごいテンションが上がり出して、「何？ここ」みたいなの、「いいな、楽しいな」ってなって。もう今は「次どこ行く？」って言ってますよ。目覚めてしまったんで、遅咲き。

夫と一緒にあれば堂々と海外旅行に行けると感じていたIさんは、海外旅行に消極的であった夫を強引に連れ出してしてしまう。夫はIさんという外的なはたらきかけによって初海外旅行を体験し、その面白さに気づき、心理的な不安要素が払拭され、海外旅行積極派へと変化する萌芽が見られる。当初大きな阻害要因であった夫を取り巻く環境に積極的に向かい合い、阻害要因の無効化という状況を自ら勝ち取ったわけである。

海外旅行に消極的だった夫が、Iさんという外部からのはたらきかけによって海外旅行に対する心理的な阻害要因を克服したストーリーはFくんの語りとも符合もしている。「海外旅行に行かない若者」を「行く若者」に変えていく方策としての外的なはたらきかけ、或いはきっかけの重要性が確認できる。

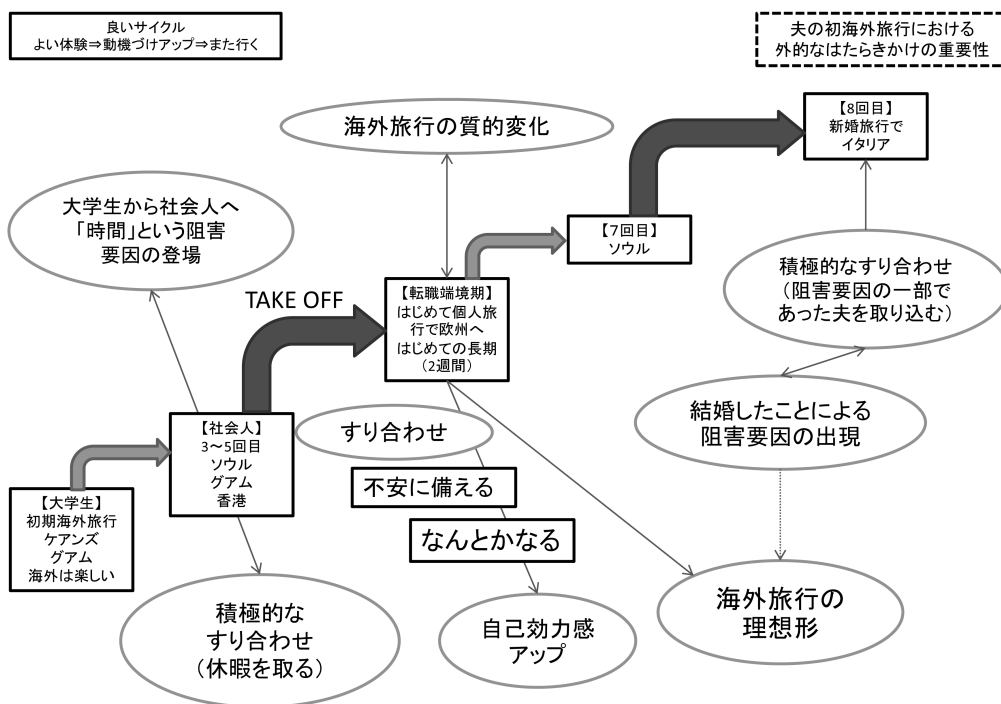


図6 Iさんのモデル図

Iさんの語りからは、強い動機づけ、良い実体験、自分への自信、そしてさらに強くなる動機づけ、という良い循環にはまる様子、そこから海外旅行のリピーターになっていく様子が読み取れる。Iさんが置かれた状況を見ると、必ずしも海外旅行への追い風ばかりが吹いているわけではない。職場の構造的な制約や夫の母という存在などの阻害要因があるのだが、海外旅行に行きたいという強い気持ちを持っているがゆえに、その障壁が高ければ高いほど何とか克服しようとする方策を探し、行動していることがわかる。

つまり、Iさんの語りを「海外旅行に行く若者は何故行くのか」という点から読んでみると、海外旅行に行きやすい、恵まれた条件が揃っている人だけが海外旅行に行くわけではない、ということが見えてくる。阻害要因を何とか克服しようとする工夫や努力の存在＝すり合わせの重要性がここ

でも浮かび上がってくるのである。このことは逆に言えば、海外旅行に行かない人のなかには、海外旅行に関心がない人だけではなく、関心はあるものの阻害要因を乗り越えるためのすり合わせを行わない、或いはどのようにすり合わせを行えばよいのかわからない人が含まれると考えられる。

Ⅲ. 結び

本稿では、“若者の海外旅行離れ”現象の当事者である若者の生の声をもとにした分析を報告した。ここで紹介した6名の若者たちの声には、それぞれに特有の状況があった。これら特有の状況を含めた個々のインタビューデータから作成した各人の語りのモデル図は本文中に図として示した通りである。

質的インタビューの目的は知識の一般化或いは仮説検証ではなく仮説構築にあるため、本稿において結論を出すことはなじまない。そこで本稿の結びとして、個々のインタビューから生成されたコードについて、個々の文脈(語り)とは切り離れた形でカテゴリー化を行い、本報告のむすびとしたい。

本稿で紹介したインタビューから生成したコードは**阻害要因**、**経験による変化**、**Catalyst(変化をもたらす触媒)**、という3つにカテゴリー化された。阻害要因は海外旅行に行かない若者の語り部分と関連し、それ以外の2つは「行かない」から「行く」への変化、および「行ってみたと」の変化についてまとめている。経験による変化は変化の内容そのものを、Catalystは変化を引き起こすものである。このなかで、Catalystカテゴリーに含まれる、「すり合わせ」「自己効力感」「身近な他者の経験」「自己の成功体験」は、先述したように、先行研究に登場する概念と符合するものだ。

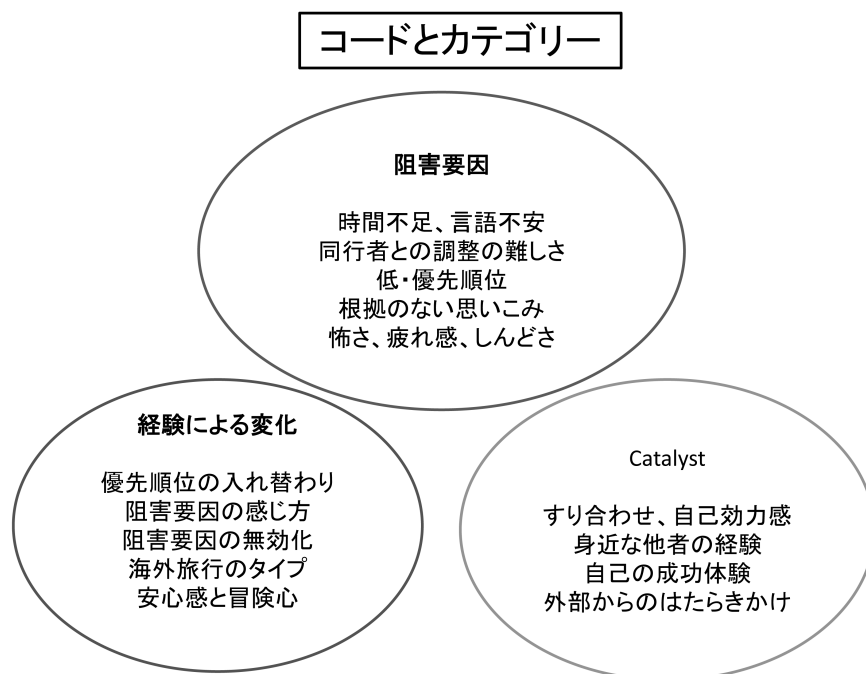


図7 コードとカテゴリー

さらに、インタビューでの語りから考察されたカテゴリーが持つ意味について、以下にまとめる。

第1に、海外旅行の阻害要因を感じている若者が海外に行かないとは言い切れない、ということである。それは、阻害要因を感じていても実際に海外旅行に出かけて行ったFくんやIさんのストーリーから読み取れる。つまり、阻害要因は絶対的な障害物ではなく、外的・内的な作用によってその知覚が変化する、あくまで主観的なものなのである。Fくん、そしてIさんの夫のように海外旅行消極派の人にとっては、積極的な同行者からの誘いといった、外的なはたらきかけが有効なようである。一方、「海外旅行に行くという考え自体がない」というような人には、FGIで語られたように、身近な他者の体験に触れるという外的なはたらきかけが機能する。これらの外的なはたらきかけはCatalystの一部である。

第2に、こうして一度海外旅行を体験することによって、そしてもしそれが達成感に繋がるような成功体験として知覚される場合には、「自分は海外旅行をうまくやることができる」という自信＝海外旅行の自己効力感に繋がっていくという点である。経験による変化だ。Fくんのストーリーで語られたように、自己効力感とは心理的な不安という阻害要因の知覚を弱める方向に機能している。但し、Jくんの語りにあつたように、たとえ「楽しい海外旅行だった」と言える体験をしていても、Mindlessnessの状態では他者(Jくんの場合は修学旅行という仕組み)に依存した旅行であった場合は、達成感は感じにくく自己効力感が高まることもないと推察できる。

第3に、「海外旅行に行く若者」の例として登場しているIさんは、様々な阻害要因を感じていても繰り返し海外旅行に行っており、ここでは阻害要因を克服するための方略を練り、実行する「すり合わせ」の重要性が読み取れた。「すり合わせ」は内的なプロセスではあるものの、その作用によって人の行動を変えるものとしてCatalyst的な性質を持つ。

「自己効力感」「すり合わせ」といった概念は、インタビュー実施の時点でははっきりと言語化されていなかったが、同時並行で行われたレジャーの阻害要因研究のレビューを通して本研究に取り込まれていったものである。こうしてインタビューから立ち現われたコード(概念)には本研究における構成概念としての名前が与えられ、前出の「海外旅行の実施頻度に関する動態的循環モデル」(図2)として概念間の関係性が仮説化されるにいたった。

本稿では、“若者の海外旅行離れ”現象を観光行動研究のアプローチから読み解こうとする研究プロジェクトにおける、質的研究の成果について報告してきた。“若者の海外旅行離れ”は、旅行業界や観光研究者をはじめ、若者の消費行動、そして若者の生き方に関心を持つ多くの人びとに注目され、各種の論評が行われてきたものであった。

観光行動の方法論からこの現象を解き明かそうとする本研究は、今を生きる若者ひとりひとりの間に存在する共通性と差異性から形づくられた複雑な全体を理解しようとするものである。観光行動研究に抜け落ちていた「なぜ人は旅行をしないのか」という問いと同時に、その裏返しとしての「なぜ人は旅行するのか」という問いの双方に絡む諸概念の探求を通して、観光行動の基礎理論構築に向けた端緒を開く試みである。現代の若者の価値観の一角としてあらわれた“若者の海外旅行離れ”を解くことを通して現代社会の構造変化を見る、観光研究を通して社会を視るという観光学の試みとして継続していきたい。

【付記】

本研究の一部は平成22～24年度に科研費(22530454)の助成を受けて実施した成果である。

参考文献・引用文献

Bandura, A.(1986), *Social Foundation of Thought and Action: A Social Cognitive View*, Engelwood Cliffs, Prentice-Hall.

Bandura, A.(1997), *Self-Efficacy: The Exercise of Control*, New York, W.H. Freeman and Company.

Cohen, E.(1972), Towards a Sociology of International Tourism, *Social Research: An International Quarterly of the Social Sciences*, 39, 164-82.

Crawford, D.W., Jackson, E.L. and Godbey, G. (1991), A Hierarchical Model of Leisure Constraints, *Leisure Sciences*, 13(4), 309-320.

古市憲寿(2011)『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.

Gilbert, D. and Hudson, S. (2000), Tourism Demand Constraints: A Skiing Participation, *Annals of Tourism Research*, 27(4), 906-925.

原田曜平(2010)『近頃の若者はなぜダメなのか』光文社.

廣岡裕一(2008)『『若者の海外旅行離れ』に関する考察』社団法人日本旅行業協会 ビジット・ワールド・キャンペーン推進室ウェブサイト掲載
< http://www.jata-net.or.jp/vwc/pdf/0809tm_databis.pdf > (2010年8月24日閲覧)

廣岡裕一・宮城博文(2008)「2000年以降における日本人海外旅行者数の伸長鈍化の考察」『第23回日本観光研究学会学術論文集』321-324.

法務省(2008) 出入国管理統計「年齢別・男女別 出国日本人(1964～2005)」法務省, 2008年10月31日公表, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001035550> 2014年5月10日閲覧.

法務省(2009) 出入国管理統計2008年「住所地別 出国日本人の年齢及び男女別」法務省, 2009年6月30日公表, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001055108> 2014年5月10日閲覧.

Jackson, E.L., Crawford, D.W. and Godbey, G. (1993), Negotiation of Leisure Constraints, *Leisure Sciences*, 15, 1-11.

当事者の声から読み解く“日本の若者の海外旅行離れ”を巡る諸概念

岸本裕紀子(2007)『なぜ若者は「半径1m以内」で生活したがるのか?』講談社.

内閣府政府広報室(2004)「自由時間と観光」『月間世論調査』平成16年2月号, 3-91.

Langer, E.J. and Piper, A.T. (1987), The Prevention of Mindlessness, *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 269-78.

中村哲・西村幸子・高井典子(2010)「海外旅行の阻害要因の知覚に関する属性間比較—若者の海外旅行離れ「論」への試み」『第25回日本観光研究学会学術論文集』209-212.

西村幸子・高井典子・中村哲(2009)「海外旅行実施に対する阻害要因の構造の検討:『若者の海外旅行離れ』をどう読み解くか」『第39回消費者行動研究コンファレンス要旨集』43-46.

西村幸子・高井典子・中村哲(2014)「海外旅行の実施頻度に関する動態的循環モデル - 若者の海外旅行離れ「論」への試み - 」『同志社商学』65(4), 337-363.

西條剛央(2007)『ライブ講義 質的研究とは何か』新曜社.

Nyaupane G. and Andereck, K.(2008), Understanding Travel Constraints: Application and Extension of a Leisure Constraints Model, *Journal of Travel Research*, 46(4),433-439.

Nyaupane G.P., Morais, D.B. and Graefe, A.R. (2004), Nature Tourism Constraints: A Cross-Activity Comparison, *Annals of Tourism Research*, 31(3),540-555.

Pennington-Gray, L.A. and Kerstetter, D.L.(2002), “Testing a Constraints Model within the Context of Nature-Based Tourism, *Journal of Travel Research*, 40(4), 416-423.

総務省統計局(不明)人口推計(各年10月1日人口)平成8年「全国、男女別、年齢各歳別人口 - 総人口、日本人人口」総務省統計局、公表日不明、<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001010889> 2014年5月10日閲覧.

総務省統計局(不明)人口推計(各年10月1日人口)平成20年「全国:年齢(各歳)、男女別人口 - 都道府県:年齢(5歳階級)、男女別人口」総務省統計局、2009年4月16日公表、<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2008np/index.htm> 2014年5月10日閲覧.

高井典子・中村哲・西村幸子(2008)「若者の海外旅行離れ『論』への試み」『第23回日本観光研究学会学術論文集』421-424.

Takai-Tokunaga,N., Nakamura, T. and Nishimura, S. (2009), A Preliminary Study on ‘Fewer Young Japanese Travelling Abroad’ , *Tourism Institute of Northeast Asia*, 5-12.

山岡拓(2009) 『欲しがらない若者たち』日本経済新聞出版社.

山口誠(2010) 『ニッポンの海外旅行：若者と観光メディアの50年史』筑摩書房.

-
- 1 たとえば、原田(2010)、岸本(2007)、山岡(2009).
 - 2 廣岡(2008)、廣岡・宮城(2008)、中村・西村・高井(2010)、西村・高井・中村(2009)、高井・中村・西村(2008)、Takai-Tokunaga, Nakamura and Nishimura (2009)など。
 - 3 古市(2011)は統計データが示す「現在ほど日本の若者の生活満足度が高かった時代はない」という主張の背景として、「今が一番幸福で、この先これ以上幸せになる見込みはない」という若者の実感、彼らの眼を通して見た日本社会の閉塞状況を指摘している。
 - 4 Gilbert and Hudson (2000), Nyaupane and Anderek (2008), Nyaupane, Morais and Graefe (2004), Pennington-Gray and Kerstetter(2002)など。
 - 5 GTAにおいてデータを再構成し、概念を生成するための方法。
 - 6 但し、方言の修正、個人が特定され得る可能性のある情報の削除、冗長な表現の削除などを行っている。
 - 7 しかし、レジャー活動の阻害要因に関する研究の系譜に1991年に登場する「階層性モデル」(Crawford, Jackson and Godbey 1991)では逆の仮説が提起されている。このモデルでは、個人のレジャー活動への意思決定プロセスにおいて各種の阻害要因が順番に関わることが概念的に示されているのだが、まず心理的な阻害要因(個人内阻害要因)を強く感じていないときに、あるレジャー活動に対する選好(preference)が形成され、次に同行者との関係における阻害要因(対人的阻害要因)の影響を受けて個人間の一致と調整(interpersonal compatibility and coordination)が行われ、最後に、時間やお金などの阻害要因(構造的阻害要因)が克服されればレジャー活動の参加に至るという主張である。この仮説は現在までのところまだ実証されていない。

